

シムポジウム

シムポジウム 1

演題名

COVID-19 後の新興感染症対策を考える

講演者

中久保 祥

所属

北海道大学医学研究院 呼吸器内科学教室 特任助教

抄録

未曾有の感染症として世界を席卷した COVID-19 のパンデミックは収束し、SARS-CoV-2 は今や社会に溶け込んだ存在となった。しかしその日常化の陰で、次なる感染症危機への備えという課題は依然として残されている。COVID-19 以降も、mpox・鳥インフルエンザ・ウイルス性出血熱など、新興・再興感染症は形を変えながら出現し続けている。次の危機に備えるうえで重要なのは、個別の病原体を予測することではない。疑い例を認識した時点で、隔離・PPE・検査・動線管理・職員曝露の把握・院内外への情報共有を再現可能に動かす「患者対応の初動」をあらかじめ整えておくことである。一方、COVID-19 はもう一つの初動の重要性も示した。データ収集と知見創出の初動である。危機下では、発生届・療養判定・ワクチン歴・重症化情報・医療負荷など膨大な情報が同時に発生する。これらをその場限りの記録で終わらせず、臨床・公衆衛生上の判断へ還元する仕組みが求められる。演者らは、COVID-19 オミクロン流行期に札幌市が運用した Web システムに登録された患者データを用い、BA.2/BA.5 流行期における症状・免疫状態・重症化リスクを解析した。このシステムは研究目的で構築されたものではなく、患者急増時に保健所機能の破綻を防ぎ、重症化リスクのある患者を医療へつなぐための実務システムであった。しかし結果として大規模かつ詳細な臨床疫学データが蓄積され、危機対応システムが学術的知見を生み出す基盤ともなり得ることが示された。次の感染症危機では、患者対応の初動とともに、発症日・症状・曝露歴・検査・治療・酸素需要・転帰などを初期から構造化して記録し、臨床・感染対策・公衆衛生・研究へ還元する「知の循環」を平時から設計しておく必要がある。本発表では、COVID-19 後の新興感染症対応を感染対策と学術的昇華の両面から捉え、医療機関および呼吸器内科医が何を準備すべきかを考察する。